

コーディネーターからのコメント シンポジウムを振り返って

石井 昌幸 (早稲田大学)

Review and Comments on the Symposium

ISHII Masayuki
(Waseda University)

佐々木浩雄先生が『スポーツの世界史』を学会シンポジウムで取り上げてくださったこと、またそのコーディネーター役に私を指名してくださったことに心より感謝申し上げます。この部分は、シンポジウム後に依頼された「発表を受けてのまとめや整理、問題提起など」です。以下、常体で書かせていただきます。

＜『スポーツの世界史』＞

はじめに、この本の成り立ちについて少し触れておきたい。『スポーツの世界史』は、もともと坂上康博さんが出版社から依頼された企画であった。その後、高嶋航さん、中房敏朗さんと私が編者に加わることになり、「スポーツの世界史」を、どのようにまとめれば良いかを四人で議論した。まず論点になったのは、競技でくくるか、国や地域でくくるか、と言う点だった。いろいろと検討した結果、やはり国や地域別に章立てするのが良いだろうということになり、では、どの国や地域を取り上げるか、各章をどなたにお願いするかを検討して、最終的に総勢20名の執筆陣となった。予定されていたボリュームよりもかなり大部になったと思うが、ご理解いただいた一色出版の岩井峰人さんに感謝したい。

冒頭で佐々木さんが触れてくださっているとおり、『スポーツの世界史』を作るにあたっては、

研究会を開くなどして執筆者間で議論する時間が、さまざまな事情から取れなかった。たしか、東京でオリンピック・パラリンピックが予定されていた2020年には間に合わせたい、ということが大きかったように思う。そのような反省点はあるが、これだけの本を予定されていた期間をそう遅れずに出版に漕ぎつけることができたのは、執筆陣の実力と努力とともに、坂上さんのリーダーシップのおかげであった。また、多数の執筆者の原稿に坂上さんが丁寧に目とおし、各章の草稿にかなりの注文（特に社会的な関心を軸に）をつけてくれたことで、最終的に全体として一定のまとまりができたように感じる。じっさい、いま読み直すと、これまでなかったスポーツ史の概説書に仕上がっていると言えるのではないかと感じる。いっぽうで、現代的な意味合いで「世界史」と呼ぶにはまだ不十分な点が多いのも事実なので、これをひとつの「踏み台」にして、今後もさらに「スポーツの世界史」が書かれ続けることを願ってやまない。

さて、今回は佐々木さんに「スポーツの世界史を考える：文明化の使命、帝国主義、ポストコロニアルの視点から」というテーマを設定していただき、そのコーディネーターを仰せつかったので、『スポーツの世界史』の執筆陣から三名の先

生方にシンポジストをお願いした。お三方とも歴史学を専攻されており、ご担当いただいた国や地域に関する広く深い知見をお持ちであることは言うまでもない。また、専門に扱っておられる時代も、おもに19世紀・20世紀で、地域もアフリカ、東アジア、オーストラリアであるから、「文明化の使命、帝国主義、ポストコロニアル」というテーマに様々なアングルから切り込んでいただけたと思っただけである。そしてその期待どおり、「スポーツの世界史」を語る際に重要なこれらのテーマについて、鍵となる論点をあげながら、詳しくお話を聞くことができた。以下では、各シンポジストのご報告から私が感じたところを述べていただきたい。

＜コロニアルとポストコロニアル＞

私（石井）の場合、スポーツ史の研究を通して知りたいことは、つまるところ三つある。「いま世界中で行なわれている「スポーツ」と呼ばれるものは、いつ頃、どこで、どのようにして形を整えたのか」「それは、なぜ広く社会的な承認・価値づけを得るに至ったのか」「スポーツは、いつ、どのようにして世界各地に広まったのか」、の三つがそれである。『スポーツの世界史』は、まさしくこのような問いに答えてくれる本となったと思う。

ところで、比較的最近イギリスで出版された、同じく良き概説書として、トニー・コリンズ氏の『資本主義社会のスポーツ』(Tony Collins, *Sport in Capitalist Society — A Short History* 一, Abingdon: Routledge, 2013) がある。同書は、18世紀後半から現代までをコンパクトにまとめた通史であるが、そのなかでコリンズは、「いつの時代にもスポーツは、そのときどきの核となる倫理規範を持ち、それを人びとに強いてきた」といったようなことを言っている。最初はアマチュアリズム、次に性別チェック、現代ではドーピング。そこにはスポーツ界の中核にいた「白人ミドルクラス男性」の自意識や倫理観が投影されていて、労働者階級（プロ）が台頭してくるとアマチュアリズムが強調され、女性アスリートが活

躍するようになると性別チェックが導入され、ソ連と東側諸国が席卷するとドーピング検査が強化された。またそのことを通じて、スポーツはその「道徳性」において他の文化（たとえば音楽や演劇など）よりも「一段上」に自らを位置づけ、それによって自己を特権化してきたのだ、とコリンズは述べている。

先に挙げた三つ目の点、「スポーツは、いつ、どのようにして世界中に広まったのか」という関心から言うと、19世紀末から20世紀の前半が第一のフェイズとも言える時代（もちろんさらに細かく区切ることはできる）で、そのときにスポーツ伝播の背景にあったのが帝国主義という時代であり、その動力となっていた自意識や倫理観念が「文明化の使命」であった。スポーツにも、帝国主義にも、世界を教化する^{モラル・ミッション}道徳的使命があると考えられていたのである。

このことについて研究史の面で言うと、1980年代頃までは、そもそも西洋側のスポーツの成立や持ち出しの背景に、そのような道徳的観念があった、ということ自体が明らかにされていく段階だったと思う。その嚆矢となったのが、マンガンの『ゲームの倫理と帝国主義』(J. A. Mangan, *The Games Ethic and Imperialism*, Harmondsworth: Viking, 1986) であった。その後、グットマンは『スポーツと帝国』(Allen Guttman, *Games and Empires: Modern Sports and Cultural Imperialism*, Columbia University Press, 1994; 谷川稔ほか訳、昭和堂、1997年) で、それまでの個別研究をまとめるかたちで、サッカー、クリケット、野球などの成立と、その世界各地への伝播史を描いた。この時点でグットマンは、スポーツの伝播がかならずしも定方向的・一方的なものではなく、受容側もさまざまな自己の論理によって外来のスポーツをアレンジしたり、非ヨーロッパからヨーロッパへの「逆伝播」すらあった、という点を強調した。彼は政治や経済とは違う「遊戯の伝播 (ludic diffusion)」の独自性を見ていく必要性を主張した。この視点は、いまにつながる新しいものだった。

た。(もっとも、このような観点自体は、文化伝播一般に関してはすでに提示されていた。たとえば以下を見よ。ピーター・バーク、中村賢二郎・谷泰(訳)、『ヨーロッパの民衆娯楽』、人文書院、1988(原書1978)年。とりわけ訳書、87頁。)

とは言え、『スポーツと帝国』の頃にも、まだ研究の蓄積はそれほど厚くはなく、グットマンの見方にもやはり「コロニアル」な枠組み(支配=被支配の二分法)を越えきれない部分があったように感じる。しかし現在、『スポーツと帝国』の原書出版からすでに30年近く、『ゲームの倫理と帝国主義』からだど、じつに40年近くが経とうとしていて、こうした研究の系譜は「グローバル・ヒストリー」と総称される視座の下で、新たな段階に入っているように見える。

この間の理解の深化は、川本報告の「イギリスに存在したスポーツがアフリカの植民地社会にそっくりそのまま「移植」されたわけではないし、以前から各地に存在した身体運動ないし身体文化が植民地支配の進展と西洋スポーツの導入によって一掃されてしまったわけではない」という発言に要約されよう。「在来の身体文化と西洋伝来のスポーツは、混在・並存していた。また、近代スポーツは「文明化の使命」という理念や思想の下で、モラルや規範を教えるための健全な娯楽という文脈で世界各地に持ち込まれるわけですが、受容側はそれに必ずしも真っ向から抵抗するのではなく受け入れた場合も多く、しかし結果として自分たち流に解体再構築してしまう、というのは、しばしば見られた現象です」というまとめにも、それは的確に整理されている。

具体的にも、川本報告にあるケニアの槍投げの事例はととても示唆的である。少し拡大解釈させていただくと、これはバフチンがラブレアの作品に見いだした中世ヨーロッパ民衆の笑いの文化(ミハイル・バフチン、川端香男里(訳)『フランソワ・ラブレアの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』せりか書房、1995年)や、バフチンの説に着目したアイヒベルクが、近代スポーツに対するオルタナティヴとして提起した理論とその実

践(ヘニング・アイヒベルク、清水論(訳)『身体文化のイマジネーション—デンマークにおける「身体知」』、新評論、1997年など)と通じるものがあるようにも思える。人類の身体文化の長い歴史に位置づけると、むしろ近代スポーツのほうが特異なものに見えてくる面もあって、深い問題をはらんでいるように感じる。その意味でアフリカは、まさに「「スポーツとは何か」を世界に問いかける大地」なのである。

〈関係史・交流史〉

ところで、「スポーツは、いつ、どのようにして世界中に広まったのか」というテーマは、いまでは「西洋から非西洋へ」という枠組みを越えて、さまざまな研究の広がりを見せている。国や地域間の関係史や交流史、東アジア圏のスポーツ史、柔術・柔道の海外での展開などの研究は、その代表例であろう(たとえば、シュテファン・ヒューブナー、高嶋航・富田幸祐(訳)『スポーツがつくったアジア』、一色出版、2017年。坂上康博(編著)『海を渡った柔術と柔道—日本武道のダイナミズム』青弓社、2010年など)。それらは、発祥の地から他の国や地域へ、という単線的な伝播だけではなく、一定の範囲内での独自の展開に関する研究、いわばリージョナル・スタディやエリア・スタディのような視点を持った研究にも展開している。高嶋さんが東アジアを舞台に展開してこられた一連のお仕事(『帝国日本とスポーツ』、塙書房、2012年ほか多数)が代表的で、その迫力には常々圧倒されるものがある(また、環太平洋圏の野球の伝播史・関係史として、以下も参考になる。Sayuri Guthrie-shimizu, *Transpacific Field of Dreams: How Baseball Linked the United States and Japan in Peace and War*, University of North Carolina Press, 2012)。

今回の高嶋報告では、アメリカ人(北米YMCA)と日本人(日本YMCA)、そして中国人が、租借地という領土でも植民地でもない場所で「文明化の使命」をめぐる織りなした緊張と葛藤に満ちたスポーツ交流が論じられた。そこで

はスポーツは「支配の手段にも、抵抗の手段にも、はたまた友好の手段にもなりえた」のである。

近年のこうした歴史研究は、壮大なパースペクティブのいっぽうで、歴史学ならではの特長も兼ね備えている。グットマンやアイヒベルクが書いてきたスポーツの伝播モデルや近代スポーツの批判・相対化の見取り図には、筆者もとても触発されたし魅力的であるが、歴史学の醍醐味は、やはり理論やモデルよりも具象。生きた具体的な人や、その人たちが作ったり動かししたりした現実のディテールであろう。スポーツ史とスポーツの歴史社会学との違いは、やはりスポーツ史では、人物や組織、事件・出来事などが克明に描かれる叙述にこそ、その要諦がある点である。そこでは、一人の人物ですら人生の中で考え方の変化があったり、組織というものも一枚岩ではなく、さまざまな事情や思惑が交錯し、うごめいている。人びとが生きて、活動しているダイナミックな姿とも言うおうか。その意味では、歴史学は社会科学の一翼でありながら、同時に文学性を帯びざるを得ないのだ。そのうえで、歴史学には時代区分という独自の課題もあるから、とりわけ、これを実践している高嶋さんの力には、いつも感服するばかりである。

〈南半球からみたスポーツ史〉

「南半球からみたスポーツ史」は、私たちにさまざまな示唆を与えてくれる。今回も、じつは三つの報告のうち二つが南半球（川本報告も主にサハラ以南）に関するものであった。また、『スポーツの世界史』第11章「ブラジル」と第12章「アルゼンチン、ウルグアイ、チリ」をご覧いただくと、特にサッカーにおける南米の重要性が理解できるであろう。オーストラリア、ニュージーランド、南アは、特に現代ラグビーに大きな影響を与えてきた。なかでも、藤川さんがフィールドとされてきたオーストラリアは、「スポーツの世界史」を考えるうえで、きわめて魅力的な場所である。

藤川さんのオーストラリア史には、スポーツが

当初から不可欠の要素として位置づいてきた。オーストラリアの歴史をスポーツ抜きに語ることはできない、というのは、常々おっしゃってきたことかと思う（藤川隆男、『オーストラリア歴史の旅』、朝日選書、1990年。また、「アボリジナルの近代スポーツ史：19世紀・20世紀のオーストラリア」、『帝塚山大学教養学部紀要(40)』、1994年、69～97頁など）。

フットボールと呼ばれる競技の世界各地での展開は、スポーツの世界史の重要なテーマである。アソシエーション式フットボール（サッカー）、ラグビー・ユニオン式フットボール、ラグビー・リーグ式フットボール、アメリカ式フットボール、アイルランド（ゲール）式フットボールなど、フットボールは各地でさまざまな形を生み出したからだ。オーストラリア式フットボールもそのひとつで、それがオーストラリアにとっていかに重要なものかは、今回の藤川さんの報告や、『スポーツの世界史』第13章ほか、これまでのお仕事を読むと、とてもクリアに、解りやすく論じられている。

「バラシ・ライン」、というのも印象的な用語であった。オーストラリアではバラシ・ラインを境界として、二つのフットボール、すなわちリーグ式ラグビーを支持する地域とオーストラリアン・フットボールを支持する地域とに分かれている。これは、オーストラリアという国のとても興味深い文化的特性である。私も学生の短期語学研修の引率で、バラシ・ラインの西側に位置するアデレードに何度も行ったことがあるが、オーストラリアン・フットボールのチーム、アデレード・クロウズとポート・アデレードが人気を二分していた。最近ではアデレード・ユナイティッドというサッカー・チームも、まあまあ人気があるが、リーグ式ラグビーは見たことがない。

アングロ圏における「クラブ文化」というものの正体は何かは、スポーツ史研究にとって鍵になるテーマのひとつであると思う。藤川報告では、それがカントリー・フットボールの伝統とも関わっていると言うのだから、余計に刺激的だ。そ

うなると、「クラブ」という存在の連合体としての「アソシエーション」という組織とは何なのかも、スポーツ史研究にとって重要なテーマだと再認識した。

＜スポーツの現代史＞

ところで、イギリスのスポーツ史研究の場合、第一次大戦までがひとつの区切りになっている。第一次大戦までが「近代」で、それ以後が「現代」のように書かれているものが多い。この区分で言うと、スポーツの「近代」についてはかなりの研究が蓄積されているが、それに比べて「現代」はまだ手薄な印象がある。さきほど紹介したコリンズ氏の通史を読んで、もうひとつ感じたのは、「現代スポーツ」の成立（たとえば国際組織の確立、労働者階級のスポーツ参加やスポーツ観戦の普及、ラジオの登場、社会主義圏のスポーツ、モーター・スポーツ、女性スポーツの普及などなど）においては、両次大戦間期、すなわち1920～30年代が非常に重要だったという点であった。この点で言うと、今回の高嶋報告でも、戦間期が重要な位置を占めていて興味深かった。

また、藤川報告では、現代の、21世紀的な状況までを通観してお話いただいたが、なかでも私は、ご報告の後半部分、「メディア・スポーツ複合体」をめぐる議論に触発された。先ほど「歴史学の醍醐味は理論やモデルよりも具象」と書いたが、モデル化や抽象化自体が悪いわけではない。むしろクリアなモデルや見取り図は、全体像の理解を助けてくれる必要なものである。マーケティング会社の説明資料を元に改編・作成されたというオーストラリアのメディア・スポーツ複合体の構造図は、現代スポーツの状況を理解するうえでさまざまに援用できる非常に有用なモデルだと感じた。

オーストラリアは、メディア王ルパート・マードックの出身地（アデレード）であり、クリケットはもちろんのこと、水泳やテニスの強化システムでも有名で、現代スポーツに大きなプレゼンスを持っている国でもある。そうでありながら、同時に国内には独特で多様なローカル・スポーツ文

化が根づいているところも見えていかないと、オーストラリア・スポーツ史はわからないということ、藤川報告から学んだのだが、あるいはそこはアメリカも似ているかもしれない。このあたりは川島浩平さん（『スポーツの世界史』第9章「アメリカ」執筆者）の意見も聴きたいところである。

＜今後の課題＞

ややまとまりに欠ける雑感となったが、最後に今後の課題について3つ触れさせていただきたい。まずは、川本さんも指摘されたとおり、ジェンダーの視点がまだ手薄であるという点は、『スポーツの世界史』全体の「欠陥」のひとつであろう。女性のスポーツ史というものをどうとらえるか、また、男性と女性という二分法（スポーツではとりわけ明確）を相対化するようなスポーツ史の視点は可能か。それをふまえて地に足の着いた通史・概説が書かれることは、残された大きな課題だと感じた。

2つめは、現代との関わりをどう書くか、という点である。たとえば、今回の「文明化の使命」と「帝国主義」は、主として19世紀末から20世紀前半に関わるキーワードであるが、これを「ポストコロニアル」という20世紀後半以降の状況と接続しながら、21世紀の現代へとつづじるスポーツの近現代史を通史としてどのように書けば良いのかは、多くのスポーツ史研究者に共有しうる課題であると思った。

3つめは、そうして蓄積された研究の先に、「スポーツ史独自の時代区分」というものを構想することはできるか、という点である。こちらはかならずしも「そうしなければならない」というわけではなく、近現代史の一般的な時代区分（たとえば両次大戦や冷戦終結を大きな画期とする）に従ってスポーツ史が説明できるのなら、それでも良いのだが、「スポーツの近代とはいつからなのか」、「スポーツの現代はいつからか」、などの問いに答えるには、政治や経済とは違った区分が必要になるかもしれない。